

松本 侑子著

神と語って夢ならず

NHK大河ドラマ「八重い、一時、島民の島民による自治政府を樹立した。本末維新史が新たなブームを呼んでいる。近世から近代にかけての日本史上最大の変革期であり、日本各地で展開された数々のドラマは、汲めども尽きない。

本書は、隠岐島の明治維新を描いた歴史小説で、興味深い。

隠岐島は、島根半島の北方四〇〇〜九〇キロの日本海上にある群島の総称である。主な島は、最大の「島後」と、西ノ島・中ノ島・知夫里の三島からなる「島前」。

古来、隠岐島といわれてきたのは島前・島後だが、群島を含む海域は広大で、韓国との領有権問題で話題となっている「竹島」も隠岐島に属している。

一時、島民の島民による自治政府を樹立した。本末維新史が新たなブームを呼んでいる。近世から近代にかけての日本史上最大の変革期であり、日本各地で展開された数々のドラマは、汲めども尽きない。

小さな島の明治維新

島民達が自治政府を自立した「隠岐騒動」を描く

高橋 千 劍 破

治政府樹立のドラマだが、井上馨介の生涯をたどる物語ともなっている。

隠岐島は、日本海に浮かぶ漁業の島のごとくだが、農業も栄んで、いっぽう北前船による日本海交易の拠点としても栄えた。そのた

後醍醐天皇の流刑地となったこと知られる。そのため尊王思想が色濃く残り、明治維新に際しては、島を支配していた松江藩を追

やがて井上は、熱烈な尊王攘夷論者になっていく。隠岐出身の国学者中沼了三の影響を色濃く受けた中西毅は、同じ隠岐の山田村の庄屋の息子で、同志となつていく。隠岐は幕府の直轄

ペリーが来航した一八五三（嘉永六年）のことである。二人が脱島して京に向つた。二人が脱島して京に向つた。二人が脱島して京に向つた。

地（天領）だが、親藩の松江藩の預け地となつており、郡代が支配している。ここに、彼らは理想とした文

武館の設立許可を再三願うが許可されない。だが彼らよる島の警護など、いわば

以上が隠岐騒動の顛末だが、物語はここで終わらない。彼らが理想とした神の

国はどうなったのか、井上らの命懸けの長い戦いは一体何であったのか。理想と現実のギャップは大きく、

明治政府は彼らの期待をこごとく裏切っていく。小さな島の明治維新を通して、「幕末維新」とは何であったのかを改めて考えさせる好著。（たかはし・ちはや氏）作家・評論家



四六判・359頁・1890円 光文社 978-4-334-92868-1

★まつもと・ゆうこ氏は作家・翻訳家。筑波大卒。著書に「巨食症の明けない夜明け」「赤毛のアンに隠されたシェイクスピア」「海と川の恋文」「恋の虫 山崎富栄と太宰治」など。一九六三（昭和38）年生。